記憶の眠る街

叶　響希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
記憶の眠る街

【Ｎコード】
Ｎ９８７９Ｉ

【作者名】
叶　響希

【あらすじ】
――特権階級がすべてを支配する世界の片隅。
軍人を嫌い、仕掛け時計職人を目指して外へ飛び出した少年には、医者になることを目指し、特権階級への道を拒んだ親友がいた。
少年はやがて青年になり、夢からも背を向けた最悪な生活の中で、親友の死を聞かされる。
そこへ唐突に現われる少女。
宝物の時計を修理してくれと頼まれた青年は、やがて、過去を取り戻し始める……。

なあ、俺はいつから何を失っちまったんだろう。
お前のために泣くことさえ、俺にはもう、できないんだろうか――。

1

忘れていたはずの記憶に切り刻まれるほど、間抜けなことはないだろう。無防備な部分をひと突きにされたはずが、実際にはどこが痛いのかわからない。身構える余裕もなく食らった衝撃と、だらだらと血を流していてもおかしくないほどの痛みに、俺はただ、呆然とするしかないのだ。――前の日までベッドを共にしていた女に翌朝いきなり別れを告げられたよりも、正直それは、ずっとこたえた。

同郷のそいつとばったり酒場で顔を合わせることがなければ、俺は本当に、一生思い出さないままでいたかもしれない。

「よお、生きてたか」

四年ぶりだというのに、突然現われた悪友の印象は昔のままだった。俺が故郷を離れた二年後にもこんなふうにばったり出会った事実があるから、こいつとはそういう縁があるのだろう。

寂れた界隈の一角にあるこの酒場は、夕方になるとお互いに無関心な常連客で溢れる。いつものように独りで店に入ろうとした俺は、ひょっこり現われたそいつに声を掛けられたのだ。

店の中は薄暗い。板張りの壁は、何年前からそこにあるのかわからない尋ね人の貼り紙や裸の女の写真、特権階級を嘲笑うような卑屈で下品な落書きで埋め尽くされている。長細いカウンターと腰の高さのテーブルがあるだけで、椅子はない。立ち飲みが基本の、上品さや快適さには程遠い、しかし押し付けがましくもない店だ。

「お前、やっぱり一度も戻ってねえの？　ええと、丸六年？」

薄汚れたカウンターで奴は安酒をロックで注文し、その後で俺のほうに首をひねった。

「なんで？」

「――と、言われてもな」

俺は煙を吐き出し、グラスを一気に空けた。店の親父に同じものを頼み、横目で奴を見遣る。
ガキの頃は俺と同じくらい悪さをしていたそいつは、今じゃ衣料品や家具を扱う実家の商売を手伝っているという。いずれは父親の経営する店を継ぐのだろう。今こうしているときはともかく、客を相手にするときは丁寧な話しかたをするのかもしれない。着ているものだって悪くもなければ、腕時計にいたっては通信機能がついた新型だ。
俺はというと、最悪の時期にある。無謀なほどの夢を持っていた四年前とは違う俺の姿が、今、こいつにはどう映るのか。ちらりとそんなことが頭を過った。
「仕事は順調なのか？　職人ってのは大変なんだろ？」
訊かれて俺は、苦笑する。
「親方と喧嘩して辞めた。半年前」
「でもお前、四年前に会ったときには、作品が品評会に出展されたとか――」
「ああ。……そんなこともあったな」
「女は？　お前、女にゃモテただろ」
「別れた。一週間前」
「今どこに住んでんだ？　ちゃんと食ってんのか？」
「久しぶりに現われたと思ったら、なんなんだよお前は。俺の素行調査でもする気か？」
なるべく不機嫌に聞こえないよう、俺はわざとおどけた声を出した。
つまりこいつには俺が、放っておけないほど惨めか、汚れた野良犬のように哀れに見えるのに違いない。無理もなかった。今の俺を鏡で見たら、俺自身がそう思うだろう。
手先も器用で映像技術にも興味のあった俺が仕掛け時計の職人を目指し、故郷を離れたのは十六のときだ。母親と妹を残して家を出た。父親はその前の年に死んでいた。俺より四つ年上の兄も父親と

同じ頃に死んだ。だからといって、生活が苦しかったわけでもない。軍人だった二人が戦死した後、国からはある程度まとまった金が支払われたし、母親は国立学校の教師という職業についていたからだ。どちらかというと、恵まれた環境に育ったと思う。それなのに俺は、絵に描いたように出来の悪い息子だった。

学校の成績も素行も悪かったが、何より軍人になることを強烈に嫌った。おやじや兄貴みたいな国の犬にはなりたくねえと、口汚く喚いたこともある。夫や長男を誇りにしていた母親を、俺は傷つけただろう。それでも俺には、夫や息子を死なせることを誇りだと思える母親の――大人の、国の、世の中の、すべてが許せなかったのだ。

今でこそ大人の建前というやつも理解できるつもりだが、その頃の俺は甘ったれていて、生意気で、どうしようもない馬鹿だった。

「お前のほうこそ、今はどうなんだよ？」

「ああ……そうだな」

俺の質問に愛想笑いのような笑みをくっつけて、かつての悪友は自分の近況を手短に語った。

付き合っている女がいること、店の仕事は思ったよりも自分の性に合っているということ、新しい車を買おうか迷っているということ。

俺は適当に相槌をうったが、どこにでも転がっていそうな話がそいつの口から飛び出すたび、しらけるのと同時に自分の落ちぶれた様を見せつけられた気がした。

話題を変えようと煙草を勧めたが、奴は受け取らなかった。やめたのだと言うが、怪しいものだ。実は、俺の残り少ない煙草を取り上げては悪いと思ったのかもしれない。それよりもはっきりしていたのは、次に口に出す話題を、奴が躊躇していたということだった。

「なあ……ルンのこと、覚えてるだろ？　お前とは仲よかった」

「ああ。久しぶりに聞いたな、その名前」

断わられた煙草を一本抜き出して口にくわえながら、俺は思わず

笑った。突如、強烈な懐かしさが腹の底から湧き上がる。そいつは俺にとって、少しばかり特別な存在だったのだ。
俺達の間でルンと呼ばれていたのは、俺よりふたつ年下の、小柄で痩せていて色白な奴だった。大人しくて読書が好きで運動があまり得意ではなく、俺達とつるんでいるのが不思議なくらいの優等生だ。しかし、ある意味では頑固な問題児でもあった。
俺とは違う意味で、ルンは頑なに軍人を嫌っていた。正確には、士官学校への編入試験を拒否し続けていたのだ。成績優秀者だけに与えられる特権階級への道を、白い顔を紅潮させ、指先を震わせながら、奴は木っ端微塵に叩き割ってしまった。特権階級のＩＤは、それを持たない者にとっては宝石より金塊より、場合によっては命より重いというのに。

――僕は医者になるんです。命を救う仕事を志す者が、なぜ人を殺す指揮官を目指さなくちゃならないんですか！

今にして思えば、優等生でもガキはガキだろう。綺麗事では世の中は動かない。
だが当時の俺は、ルンのことを他の連中とは違う意味で気に入っていた。軍人嫌いだった俺には同志のように思えたし、そして、今でこそ白状すれば尊敬もしていた。俺はただ闇雲に大人達を否定したかっただけだが、奴には奴の中で筋の通った理屈があったからだ。
俺はルンを侮辱する存在を許さなかったし、ルンは素行の悪い俺を怖がりもせず蔑みもしなかった。
俺が故郷を離れてからは、一度も会っていない。元気でいるだろうかと、今更のように思う。
「あいつのことだから、いい医者を目指してるだろうな」
「……死んだよ」
やっぱり知らなかったのか、と。悪友は呟いて、それまでちびちびとやっていた酒を呷る。

火をつける寸前の煙草を、俺は唇と指から完全に取り落としていた。
「一年半ほど前らしい。商売上の知り合いから聞いて……俺も、知ったのは最近なんだ」
俺は馬鹿みたいに固まったまま、こいつの声はいつからこんなに聞き取り難くなったのだろうかと、見当違いなことを思った。いつもは気にならない店内の喧騒のほうが、やけに耳につく。
「あいつが死ぬ何ヶ月か前……あいつ、俺の店に買い物に来て、お前の話になってさ。お前とこの街で偶然会った話をしてやったんだ。お前の作品が品評会に出展されたってことを教えたら、あいつ嬉しそうに、そんなことくらいではまだ驚いたりしませんよ、なんて言いやがる」
俺は、十四歳のままのあいつの姿を想った。優等生ぶった物言いはあいつの悪い癖だ。
「あいつ、日付や空の色まで覚えてたんだぜ。いつか広場の時計を修理してみせるって、お前が俺達に宣言した日のことを。それで……俺、初めてわかったんだ。あいつがお前と親しくしていたのは、お前が怖かったからでもお前を利用してたからでもなくて、あいつ――ルンは、ちゃんとお前と友達やってたんだなあってさ」
「……な……んだよ、それ」
やっとのことで、俺は声を出した。滑稽なくらい、動揺していた。
俺は、久しぶりにその名を聞いた瞬間、疑いようもなく想像したのだ。あの、色白で細かったルンも、俺と同じように声変わりをして、髭も生えて、女を部屋に連れ込んで――俺とは違って家族を作り、俺よりはましな生活をして、周囲を認めさせて、もしかしたら何か大きな功績を挙げるのではないか、と。そのとき俺は、たとえ地べたを這うような生活をしていても、垢にまみれた硬貨で新聞を買うに違いないのに。
「なんであいつが死ぬんだよっ！」
遅れて声を荒げた俺に向けられたのは、今度こそ完璧な哀れみの

視線だった。
「国境付近で大きな反戦デモがあったことは、お前だって知ってるだろ？　……ルンは、その中に医者の卵として参加していたらしい。軍が発砲して……それで」
この世界は腐っている。極端に階層化されたこの国を支配するのは、一握りの特権階級だ。そして彼等が命令を下せば、軍は武器を持たない女子供にすら容赦なく銃口を向ける。
けれど――俺のほうが。
その死を信じたくない一方で、ガキの頃からの意志を貫いて逝ったに違いないルンをほんの少しでも羨ましいと感じた俺は、きっともっと腐りきっている。
「……なあ、ディル。一度くらい家に帰ったらどうだ。せめて連絡くらいしてやれ」
それで俺は、ようやく察した。こいつはこれを言うために、俺に会いに来たのかもしれない。
考えてみれば、真っ当な仕事に就いているこいつが、わざわざ俺が出入りしているような界隈に足を向ける必要はないのだ。
誰かに頼まれたか、純粋な親切心か。どちらにせよ、偶然ではなく俺を探して会いに来たのだろう。
「お前、こんなとこで終わっちゃいけねえよ。……ルンのためにも」
俺は答えることができずに、震える手でグラスを握りしめていた。
余計なお世話だと思う反面、まだ世の中のすべてから見放されたわけではないことに安堵している自分自身が、なおのこと惨めだった。

シティは、幾つかの領域に区分されている。生活水準や職業によって居住する場所が制限され、下層の者が上層の領域に出入りするには特別の許可証が必要になる。シティの中心には白亜に塗装された巨大な要塞が築かれ、その内側と外側で世界は違った。外側の世

界は、内側に比べれば文化が百年は遅れているし、町並みも古く治安も悪い。内側の世界は完全に整備された都市で、その中には更に特権階級のための住居区が用意されているのだ。

特権階級ではないにしろ、俺も家を出るまでは内側の住人だった。今でもＩＤ登録が抹消されていない限り、戻る権利はある――その意志がない、というだけで。

俺の今の住処は、廃工場の一角にある。居候していた女の部屋を一週間ばかり前に追い出されてから、それまで材料探しに訪れていた場所をそのまま根城にしてしまったというわけだ。荷物は、大きめのリュックに納まるほどしかない。今の俺には、雨露さえ凌げれば、どこで寝起きしようと同じことだった。

そして俺は、廃材の中から材料を探しては、未だに時計を作っている。馬鹿げていると、自分でも思うのに。

――すごいですね、ディル。あなたにはこんな才能があったんだ。

廃工場の暗闇に、あいつの声が聞こえたような気がした。まだ変声期前の、女みたいに高い声だ。

本当にどうかしている。

俺は酔った頭の中で自嘲しながら、壊れた窓から降り注ぐ月明かりだけを頼りに寝袋まで歩み寄った。

目の前がぐるぐると回っている。今夜はさすがに飲み過ぎた。

俺は、こんなにも脆かっただろうか。

六年間も会っていない昔馴染みを失ったことが、こんなにもこたえるなんて。

いや、ルンが死んでしまったことだけじゃない。あいつのことを意識して思い出せば、自分が家を出たことも親方に弟子入りしたことも、大勢の前で評価された悦びも、時計作りをやめられない事実も、考えずにいられなくなる。忘れたい記憶に、俺は切り刻まれる。

挙句、酒に飲まれていれば世話はない。

俺は冷たいコンクリートの上に膝を折り、崩れるように寝袋にうつ伏せた。
「……ねえ」
誰かの声が、まどろみに引き込まれる寸前の俺の意識に入り込む。
無理矢理まぶたを上げると、月明かりの差し込む窓辺に、人影があった。
「ディルク・アルトナー？」
影がしゃべった。夢なのか現実なのか、それさえわからない。
幻影を見てしまうほどに酔いが回っているのだろうかと、わずかに残った理性で思う。
「……ルン……」
そんなはずはないとわかっているのに、思わずその名が口をついて出た。
「酒臭いなあ、もう」
影が、何か言っている。

――時計職人なんて、夢のある仕事ですよ。僕、すごくいいと思います。

俺も、そう思っていた。本当に、そう信じていたんだ。
この腐った世界を、時計仕掛けの音楽や立体映像や人形細工で、少しでも明るく照らせると思った。そんな馬鹿みたいな夢を、自分なら叶えられると信じていたんだ、昔の俺は。
でも――でも、ルン。
俺は、お前が言ってくれるほど強くもなければ、才能に恵まれてもいなかった。
「……ごめ……な」
俺を、嘲笑するか。
お前が死んだと知っても、涙すら浮かばない。
機械の目も生身の目も、すっかり乾いたままで。

なあ、俺はいつから何を失っちまったんだろう。
お前のために泣くことさえ、俺にはもう、できなくなってしまったんだろうか――。

2

目覚めは最悪だった。
耳鳴りがして、身体が重い。
俺は寝転がったまま、ぼんやりと天井を見ていた。
もともとは工場だっただけあって、天井はやたらと高く、鉄筋の梁があちらこちらに走っている。どれも赤茶けた錆び色をしていて、いかにも捨て置かれた廃墟といった風体だ。錆びついた機材が放置され、コンクリートの床には汚れや亀裂も目立つ。
壊れてうまく閉まらない窓からは、外の風が無遠慮に入り込んでくる。今はまだいいが、もう少し寒い季節になったら、ここでの寝起きは辛いだろう。
そういえば、身体はだるいのに腹は減っているらしい。俺の気力に反して、胃袋は生きようとする本能に忠実だ。かといって、食う物もない。安酒を口にすることはあっても、もう何日、食事らしい食事を摂っていないだろう。
俺は回転の遅い頭で、脈絡のないことばかりを考える。腐った生活を始めてから、いつもこの調子だ。
今日は陽が翳るまでずっと寝ていようかと思った、その矢先。
「いい加減、起きたら？　もうお昼になっちゃう」
耳元で響いた高い声に、俺は両目を見開いて飛び起きた。
「みっともない。だらしなく酔いつぶれちゃって」
上半身を勢いよく起こした途端に頭痛を感じ、俺は顔をしかめながら声の主を見た。
腰に届きそうなほどの長い髪を二つに結んだ娘――いっそ幼い印象の、十二、三歳の少女が立っている。黒いワンピースに白い肌、蜂蜜色の長い髪。人気のない廃工場には場違いな存在だ。
「誰だ、お前……？」
「わたしはリゼットよ。あなたがディルク？　ディルク・アルトナ

ー？」
いきなり名前を呼ばれて、俺は片手で髪の毛を掻き回した。
「……だったらなんだよ」
フルネームで呼ばれるのは、好きじゃない。名前そのものが嫌いというよりは、教師や軍人に呼び止められる瞬間を連想してしまうからだ。つまり、いっぺんで気に食わない気分になる。
ところが目の前の少女――リゼットとか名乗った侵入者は、まったく悪びれるそぶりを見せない。
「ルンって誰？」
ただでさえ気分の悪い俺は、これで一気に不機嫌の底まで落とされた。
「昨日、寝言みたいに呼んでたわ。恋人？」
「関係ねえだろうが。大体、何様のつもりだ。ここはお嬢ちゃんの出入りする場所じゃねえし、俺はガキにも興味ねえよ！」
俺は怒鳴るように吐き捨てると、腹の辺りでもたついている毛布を肩まで引き上げ、背を向けて横になった。
と、そこで気がついた。昨晩、寝袋の上に倒れ込んだところまではおぼろげに覚えているが、毛布を掛けた記憶はない。無意識でそうしたのかと考えてみたが、そうではないだろう。
ごめんなさい、と声がした。
「勝手に入ったのは、どこからが入っちゃいけないのか、ドアも線もなかったからで……あと、勝手に毛布を引っ張り出したのも、気に障った？　でも、何も盗ってないし、悪気はなかったの。だってね、寒そうだったし……」
「――ルンは、俺の昔の親友だ。……死んだらしい。昨日知った」
長くなりそうな言い訳を遮るように、気づいたら口走っていた。
声に出して初めて、自分がルンをどう思っていたか気づく。ルンはどうだったか知らないが、少なくとも俺は、ただの仲間以上のものを奴に感じていたのかもしれない。
あまりにも今更なのが、痛かった。二日酔いのせいではなく、喉

の奥が重い。
それきり黙った俺の耳元に、少女がしゃがみ込む気配がする。
「綺麗な色。ミルクティみたい」
なんのことかと思ったら、俺の髪の毛のことらしい。ミルクティというのがいかにも少女趣味だが、実際はほんの少し灰色がかった薄茶色の髪、という意味だ。
「ずっと前にいた街に、こういう毛色の猫がいたわ。足の先だけは白かったけれど。生意気で、でも人懐っこい猫だったの」
細い指がゆっくり伸びてきて、俺の髪に軽く触った。無視していると少し大胆になって、いい加減伸びすぎた髪を撫でるように梳いていく。
俺は猫じゃない。
当たり前のことを当然のように思ったが、わざわざ抗議するのも馬鹿らしい気がして、俺は横向きの身体を仰向けに反転させた。本音を言えば、まるで慰められているようで癪だったのだ。
「……お前、一晩中ここにいたのか？」
「ううん。夜はちっとも話にならないと思ったから、今朝、出直したの。そうしたら、まだ寝てた」
ニキビに悩まされたことなどないだろう頬を軽く膨らませ、少女は俺の顔を覗き込む。
「もう、起きる気になった？」
「俺になんの用だ？　お前……ええと」
「リゼット。ちゃんと自己紹介したのに」
「ああ、そうか。で、なにしに来たんだって？」
ぞんざいな俺の態度に気を悪くした様子もなく、少女――リゼットは、ポケットから楕円形の小箱を取り出した。見るからに金属製で、なめらかな表面をしている。
「宝物を直してもらおうと思って」
「なんで俺に？」
「この辺りで、精密機械に詳しくてお金に困っていそうで友達の少

ない人を探したの」
「……ああ、そ」
どうやらリゼットは、良い意味でも悪い意味でも、思ったことをそのまま口にしてしまう性質らしい。子供故の率直さとマセガキ特有の生意気さが半々、といったところか。どちらにせよ、腹の中で何を考えているかわからない輩よりはましだろう。もっとも、実はとても強かに本性を隠している恐るべきガキだったりするのかもしれないが。
俺は、ようやく回転を始めた頭でそんなことを考えながら、上半身を起こした。
「貸してみな」
手のひらの上に乗せられた箱は、思ったよりも重量がある。俺は、全体的に丸みを帯びた楕円形の箱を開けて思わず息を呑み、リゼットを盗み見た。
それは、小さな仕掛け時計だ。
文字盤の周囲には金属製の動物や人間のオブジェが配置され、立体映像と音楽を流す仕組みになっている。規模は違うが、考えかたは巨大な仕掛け時計と変わらない。この種の小さな時計は、時間を知ることそのものよりも、金持ちのステイタスや親から子への愛情表現の方法として用いられることが多い。
驚いたのは、リゼットから手渡されたこの時計は、内側の人間――それも、特権階級の者でなければ持ち得ないような、精巧な代物だったからだ。それでも俺は何気ない素振りを装い、時計を目の高さに持ち上げた。
「……ぶつけたか落としたかしたろ？」
「うん。大急ぎで荷物をまとめていたときに、机から落としちゃったの」
「こりゃ、一度分解してみないと駄目だろうな。ちゃんとした店に持っていって、きっちり修理してもらったほうがいいぜ」
リゼットは下唇を突き出して、まるで恨むような目つきをする。

わかっていて口にする俺も意地が悪いが、店に持っていけない事情があるからこんな所にまでやって来たに違いない。もしかしたら、盗品だろうか。
「ふ……ん、訳ありか。いつまでに修理すればいい？」
「できるだけ早く」
「でも、二、三日はかかるぜ。ここじゃあ部品が揃うかもわからねえし」
「修理代払えるかどうか、聞かないの？」
「払う気があるなら、払える分だけ置いていけ。それに、直るかどうかやってみなけりゃわからねえぞ」
俺はいい加減に答えながら箱を脇に置くと、胸のポケットを探って潰れた煙草を取り出した。床に転がっていたライターで火をつけ、深く吸い込む。
リゼットはまるで珍しいものでも見ているように、俺の一連の動作を見つめていた。
「なあ、これをどこで手に入れたんだ？」
煙を遠くに吐き出しながら、俺はリゼットのほうを見た。
「マティアスからもらったの。マティアスはわたしの愛する人よ」
「愛する人、ねえ」
わざと反芻して、俺はしらけた声を出す。恋すら知らないような少女が当然のように誰かを愛するなどと発言することが、滑稽にすら思えたのだ。ぬいぐるみのクマや洋服を一番大事だと言うなら、笑って済ませただろうが。
「……意味わかって言ってんだか」
「わたしの家族で、わたしの恋人で、わたしの故郷。――わたしのすべてよ」
淀みなく告げられた台詞に、俺は危うく煙で咽そうになった。
真っ直ぐにこちらを見ている瞳は真剣そのもので、俺はその大きな青い目に射竦められたように背筋を伸ばしてしまう。どきりとした。

ガキのくせして女みたいな目をしやがる。
「リゼット、お前……歳は？」
「十三歳と七ヶ月と五日。もう子供じゃないわ。……まだ、大人でもないかもしれないけど」
「――かもな」
煙草をくわえたまま、俺は笑った。
リゼットくらいの歳の頃には、俺も自分を子供じゃないと思っていた。そして、同じくらい大人でもないことを知っていたような気がする。子供扱いされることを嫌い、かといって大人に敵わないことがあると、五年後には自分だって同じことができるはずだと捨て台詞を吐いた。
実際は、九年経った姿が今の自分なのだ。身長と体重が増えた以外には、酒と煙草の常習者になったことくらいか。ただ年月が過ぎるだけで憧れた大人になれると思った馬鹿なガキは、結局、馬鹿な大人にしかなれなかった。
「右と左で少し瞳の色が違う。片方は義眼なのね。ディルクは、もともとは内側の人？」
「……だったらどうした」
突然、目の前に顔を突き出して、リゼットは首を傾げる。俺は機械の右目を、長い前髪でそれとなく隠した。
「どうして出たの？　内側のほうが、綺麗なところなんでしょう？」
「行ったことがないのか？」
「ないわ。わたし、ＩＤを持っていないの。マティアスが助けてくれなかったら、きっと養成所に入れられて、今頃は戦場にいたかもしれない」
あどけない唇から零れる台詞は、この世界の絶望の象徴だ。
庇護者を失った十三歳以下の子供は、国の管理する養成所に送られる。そこで、あらゆる教育を受けさせられるのだ――主に軍で活躍するための人材として。
もしリゼットの言うことが本当なら、国の目を逃れた子供だとい

うことになる。つまり、リゼットは「存在していないはずの子供」なのだ。そういう子供を見たのは初めてだった。
俺の育った環境には、実際に養成所送りになった子供はいなかった。それは多くの場合、外側の世界で起こる悲劇であって、ガキの頃の俺はそれを悲劇だとさえ感じていなかったのだ。
「ねえ、どうして？　どうして内側の人がこんなところで寝てるの？」
「それは……俺は時計職人になりたかったからさ。内側にも時計屋くらいはあるが、もともと仕掛け時計の技術は、外側の世界で受け継がれてきたんだからな。……俺は、どうしても本物になりたかったんだ」
初対面の少女を相手にクソ真面目な返事をしている自分を滑稽に思いながら、俺は内心で認めてもいた。俺の言っていることは事実ではあるが真実でもない、と。
俺は、夢を理由にして内側の世界からの逃亡を図っただけなのかもしれない。自分でも気づかないうちに、俺は夢を利用していただけなのかもしれない。
俺の右目を奪った内側の世界から、いつだって俺は逃げ出したかった。夢を願う気持ちと同じくらい、俺は心の底で怯えていたのだから。
「じゃあ、ディルクはとても勇気のある人なのね。マティアスが言っていたわ。自分の信じる道のためにそれまでの生活を変えることは、とても大変で勇気のいることだって」
「……その、マティアスとかっていう奴は」
何者かと訊こうとした俺の声は、能天気な明るい声に掻き消された。
「ねえこれ、全部ディルクが作ったの？」
子供らしいちょこまかとした動きで、リゼットは壁際に並ぶ俺の残骸達の前に移動している。
十近くもあるガラクタと、そしてここにある唯一の完成品だ。特

別な装置も部品もないこの廃工場で作った鉄屑以上仕掛け時計未満のガラクタ達さえ、俺は自分の周囲から遠ざけることができない。じっと見ていれば叩き割りたい衝動に駆られるくせに、側に置いておかないと不安になる。そうやって俺は、やっと今の状態にしがみついているのだ。

「動くの？　人形？　機械？　あ、これは時計ね！　仕掛け時計」

「無闇に触んなよ」

「ね、これが一番綺麗。なんていう作品？　名前、ないの？」

「……『帰還のとき』」

勢いに押されつつ、俺は煙と一緒に作品名を吐き出した。

四年前、俺の作品が最初に認められたときのものだ。俺はあれ以来、この作品を超える物を作ることができない。できないまま四年を過ごしながら、そこそこの技術と知名度を獲得し、それなりの職人の道を歩むようにはなった。なったが、それだけだ。

――夢を叶えてくれるんでしょう？　ディルには、僕らにはない特別な力があるんだから。

夢から見放されることが怖くて背を向けるような俺に、一体、何ができたというんだろう。

ルンは俺に何を期待して、何を信じてデモに参加し、軍の銃弾を浴びたのか。

あいつは意識を手放す寸前まで、俺がいつか約束を守ることを疑わなかっただろうか。

俺は――どうして。

「今度、この時計が動くところを見せてね！」

暗い感情に引き込まれそうになったところを、リゼットに強引に引き戻された。それを救いだと感じてしまったのだから、今朝の俺はどうかしている。

俺は苦笑いしたい気分で、根元まで燃え尽きたタバコを床で揉み

消した。
「身体は食料で育つけど、心は愛が無きゃ育たないの。この時計には心があるわ。心のある人は、きっと愛のある人」
「……なんだって……？」
本当に、子供なのか大人なのかわからない。
ほとんど呆気にとられている俺の前に戻ると、リゼットはカラフルな薄紙に包まれた飴玉をポケットから取り出した。
「ちゃんと食事を摂りなさい。とりあえずわたしのおやつをあげるから」
「いらねえよ」
「人の親切は素直に受け取るものよ」
どうせ親切にしてくれるなら、もっと腹の膨れるものを寄越せ。
俺は腹の内で反論したが、勝気なくせに無邪気な顔を目の前にして、何も言うことができなかった。寝起きから、すっかりペースを崩されたままだ。
じゃあまたね、とまるでそれが当然の挨拶のように言い残し、リゼットは手を振って背を向けた。引き際はなかなかあっさりしている。
「……マセガキ……」
長い髪が蝶々のように背中で躍る様子を見送りながら、俺はやっと悪態を吐く。
ためしに口の中に放り込んでみた飴玉は、気絶しそうなほど甘ったるくて、なぜか妙に懐かしく――脳裏に一瞬浮かんだガキの頃の自分を打ち消すように、噛み砕いていた。

独りになった俺は、どうしようもなく実感する。
俺はまだ、洗練された時計やその細工に触れることに、喜びを感じるらしい。
突然現われた少女の依頼を断われない、その時点で。俺は、少し

も懲りちゃいないようだ。
――俺がいつか、お前らの度肝を抜くような時計台を建ててやるよ。
今にして思えば、どこにそんな根拠があったのかわからない。ただ、俺がガキだったからか。
残り一本になった煙草に火をつけ、吐き出した煙の行き先をぼんやりと目で追いながら、俺は目を細めた。そこに、あいつがいるかのように。
「なあ……」
もしもお前ともう一度会えるなら。
俺は懺悔するだろうか。そうしたらお前は、今度こそ俺を断罪するだろうか。
俺は――。
人殺しだ。
俺の特別な右目は、夢を叶えるために存在したんじゃない。
それでも俺は、まだ呼吸をしている。――お前さえ命を落とした、掃き溜めのようなこの世界で。

3

俺の右目は、俺が九歳になる直前に機械になった。

生身の両目で見た最後の映像は、目の前に迫る鉄の柱だった。立ち入り禁止の軍用地へ探検に出かけた、その帰りのことだ。雨が降り出したことも、覚えている。鉄柵によじ登り、敷地の外に出ようとしたときに、俺は足を滑らせた。柵にしがみつこうとしたせいで余計にバランスを崩し、顔面から柱の角に激突したのだ。ちょうど太いネジが飛び出していて、俺の目を抉った。

一緒にいた兄貴や友達の悲鳴が、激痛の寸前、鼓膜に届いたような気がする。

右目を失ったのは他の誰のせいでもない、俺自身が招いた事故で、悪い偶然の結果だろう。

気がついたら、俺は軍の医療施設にいた。そのときから、俺は普通の子供であることを否定される存在になったのだ。

朦朧とした意識の中で、軍の関係者が両親へ説明する声を聞いた。

この子には、特別な処置を施すことにしましたよ。息子さんは運がいい。義眼との相性次第では以前より視力も上がっているはずです。……いえ、一定期間訓練は必要ですが、日常生活に差し支えはないでしょう。この先数年は経過を記録させてもらいたい……症例は多いほうが今後の我々の……。

ガキの俺が会話のすべてを理解したわけではなかったが、自分の身に何か特別な事態が起こったことだけは感じていた。

もともと軍人だった父親は軍の恩恵だと喜び、母親は俺が失明を免れたことを喜んだ。俺自身ですら、自分を幸運だと思ったくらいだ。

義眼の照準を合わせるコツを覚えてしまえば、暗闇の中でもよく

見え、遥か遠くの対象物をズームアップさせることもできる新しい右目は便利なものだった。定期的に検査を受けさせられることを除けば不自由はなく、だから馬鹿な俺は、自分の存在意味を知るまでに時間がかかってしまったのかもしれない。

疑問を抱き始めたのが事故から二年後、そして決定的な台詞を聞いてしまったのが三年後――十二歳になる頃だったように思う。

定期検査を終えて研究施設の中を歩いているときに、聞いてしまった。

訓練次第では、優秀な兵士になるでしょうな。検体にしておくには惜しい。いっそ左目も取り替えて完全な狙撃手に育ててはどうだ。なに、脳手術をすれば自我など失われる。養成所の子供は皆、そうやって戦場へ送り出されるのだから。

立ち聞きしたそれが、どこまで本気の発言だったのか今でもわからない。ただ俺は、自分がどうやら殺されるも同じ運命にあったらしいことを、悟った。

あのとき、俺の中で何かが崩れたのかもしれない。

右目はその瞬間から、世の中で最も忌まわしいものになった。

雑踏の中を歩くとき、俺はなるべく人の顔を見ないようにする。俺の見え過ぎる右目は、疲れきった表情の奥にある悲しみも、無表情の底に横たわる苦痛も、笑顔の裏にある虚無さえ見抜いてしまうように思えるからだ。

俺が寝袋と毛布の寝床から這い出たのは、昼を少し回った頃だった。昼間は上着が要らない季節だ。夕食時の頃にならないと陽は沈まない。

俺の主な行動範囲は、メインストリートから外れた、それでも人通りの絶えない路地だ。この界隈には、小さな店が密集して並んで

いる。どの店も古くて清潔感に欠けるが、品揃えもそれなりで値段も安い。酒場や食堂は一様にどこか胡散臭いが、そもそも真っ当なレールからはみ出した連中しか寄りつかないのだ。この界隈一帯が無法地帯などと呼ばれているのも頷ける。今では俺も、立派にここの住人だ。

俺は背中を丸めてズボンのポケットに両手を突っ込み、ポケットの中の小銭を指先で弄びながら通りを歩いていた。煙草を買うか、食料を買うか。リゼットに言われたからではないが、今日のところは何か腹に入れて、修理にとりかかるべきなのだろう。たいした報酬を期待しているわけではないが、煙草をひと箱買うくらいの修理代を想像しても罰は当たるまい。

この界隈を構成する色は、ほとんど灰色や茶色の類で占められている。鮮やかなものといったら、喧嘩で流れる血の色くらいか。ここに集まる者は皆、何かに苛立っているか、苛立つことにさえ飽きている。前者同士が些細なことでぶつかり合って血を流すのは日常茶飯事で、後者は死人でも出ない限りは傍観を決め込むのが常だった。

「生き残りらしいぞ」

唐突にそんな声が届いて、俺は視線だけを上げる。

まだ店を開けていない酒場の入り口に、数人が集まっていた。顔見知りの姿もある。俺は、その人だかりから外れて歩いてきたひとりに何事かと訊ねた。

「国境から来た奴がいる。重傷を負って生きて戻ったっていう、それだけのことだ」

俺のほうを見向きもせず、男は答えた。他人のことはどうでもいい。そう言っているようにも聞こえるが、事実、そう思っているのだろう。

いつもの俺なら、まず呼び止めることもしなかっただろうし、わざわざそのほうへ足を向けることもしなかっただろう。

数人の輩が、ひとりの人物の周りを囲んでいた。脅しているわけ

でも暴行しているわけでもなく、話を聞いているのだ。この界隈には色々な過去の持ち主がいる。犯罪者や脱走兵、ただの家出人まで様々で、よそ者から得られる情報に一喜一憂したり、この街から逃げ出したり、逆に居直ったりする。

「もうしわけありませんが、軍のことはあまり詳しく知らないのです」

人だかりの中から落ち着いた声がして、俺は足を止めた。男にしては柔らかい声だが、軟弱そうな印象ではない。顔を見てやろうと背筋を伸ばしたが、体の大きな奴に邪魔されて俺からは見えなかった。

「怪我を負った際に、昔の記憶が曖昧になってしまって……」

癖のない話しかたに誘われるように近づいた俺は、ついによそ者の横顔を見た。

栗色の髪と色白の肌が、一瞬、俺の中で懐かしい顔と重なる。

「でも僕は、軍人という職業は好きではないので」

――僕は軍人になりたいなんて思ったことはありません。

「ルン……！」

気がついたら、俺は周りを押しのけてそいつの目の前に飛び出していた。俺の大きな声に驚いてこちらを見た男と、真っ直ぐに目が合った。

一瞬の沈黙が広がった後、再び周囲にざわめきが広がる。

よそ者の男は、俺よりも少し年上に見えた。ルンとは瞳の色が違うし、ルンにはあった左眉の上のホクロがなく、唇や鼻の印象も記憶とは合致しない。

「わ……悪かった。人違いだ」

自分でもはっきり自覚するほど、俺は落胆していた。こんな間抜けなことはないと、心の底から思う。俺は正真正銘の馬鹿だ。見れば見るほど別人の男を、見間違えるなんて。誰よりも優れているは

ずの目も、使う脳味噌次第では人並み以下らしい。
「どなたかをお探しなんですか？」
それでも、取り成すような柔らかい声に俺は縋った。乞食が残飯さえねだるように。
「あんた……一年半前に国境付近で起きた反戦デモの関係者？」
「いえ、僕は東の国境側から来ました。その頃大きなデモ活動があったのは、北側の国境付近でしたから」
あっけなく否定された言葉に、俺は捨てられた看板みたいに立ち尽くすしかない。そんな都合のいい偶然なんて、起こるはずがない。起こるはずがないと頭の端ではわかっていたのに、俺は自分を笑うこともできなかった。
「ルンを知らないか？　いや――エミールっていうんだ、本当は」
男は黙って首を振る。
それでもう十分だった。
「あの……っ」
呼び止めようとする声を無視して、俺は踵を返した。出来損ないの道化師人形にでもなった気がした。
今更、だ。今更あいつのことを思い出しても、面影を探しても、それが一体何になるのか。
俺はどこかで道を誤って、坂道を下りながら生きている。坂の上にあったはずの何かは、いつの間にか形すらわからなくなった。
じゃあなんで、こんなにも息が詰まるのか。
まるで、見えない血に染められていくように。俺は一生、このわけのわからない痛みに耐えなくてはならないのか。
いっそ喚いて当たり散らして、誰かの傷つく顔を見ることで溜飲を下げることができるほどガキならよかった。悪友達と問題ばかり起こしていた、あの頃のように。
結局、固いパンと干し肉を手に入れて、俺は廃工場へ戻った。い

くら落ちぶれても、餓死しようと思えるほど、死ぬことに積極的にもなれない。それが軽蔑されることなのか褒められることなのかさえ、俺にはわからないが。

食事を済ませた俺は、頼まれた時計の修理を始めた。

リゼットが置いていった小さな仕掛け時計は、やはり高価なものらしい。仕上げも実に細やかだ。

実際に道具を引き寄せて作業を始めると、腐って渦を巻いていた気持ちが少しずつ楽になっていく。熱中すればするほど、俺は思い知る。

俺はこの仕事が好きなのだ。

腹いっぱいメシを食うよりも、まともな住居を手に入れるよりも、上等な女を抱くよりも。きっと俺は、こうしていることが幸せなんだろう。

それはもう、悲しいくらいに。

右目のおかげで、俺はほんのささいなネジの緩みや接着ミスも見逃さない。他の奴なら見落とすような汚れや傷も見える。そればかりか、温度や特殊な光を感知する機能さえある。日常生活では左目との折り合いをつけることに意識を払う必要があるが、この仕事をしている間は、存分に右目の機能を活かすことができる。

本来は軍事的な意味を持つ、人殺しの道具であったとしても。俺は、自分がそんな部品になってしまうことから、なにがなんでも逃げたかった。いくら喧嘩や窃盗事件を起こして暴れても、それで自分が癒されないことは、俺自身が一番知っていた。だから俺は、巨大要塞のような壁の外へ出ることを願ったのだ。

内側からいきなり外の世界へ飛び出した俺は、ひと月近くあちこちを放浪して、やっとある村に辿り着いた。白い壁の見えない、遠い場所だ。仕掛け時計職人達が形成する集落で、内側でも名の知れた職人が何人も住んでいる。

俺を受け入れてくれた親方は、俺の父親よりも二十歳は年上だった。いわゆる職人気質の頑固者ではなく、話好きで陽気で、酒と冗

談が好きな爺さんだ。四十年来連れ添った妻と、二人で暮らしている。子供はいない。戦争に取られて死んだらしい。
十六歳からずっと、俺は親方夫婦の家の離れで寝起きをしていた。今から一年ほど前――つまり親方の家を離れる半年前にあの事件と遭遇するまで、村を離れる日のことなど考えもしなかったのだ。
村外れに脱走兵が住み着いたという噂は、すぐに村中に知れ渡った。だが、誰も積極的に軍に知らせようとはしなかった。口にこそ出さないが、誰しも戦争を憎んでいる。そしてできることなら、その男が自分達の関与しない場所で幸せになって欲しいと思っていた。
俺は、俺自身とそんなに歳の違わないように見えるそいつと、話をしたことがあるわけじゃない。ただ、村の中心にある大きな仕掛け時計の前で姿を見かけただけだ。
「……ここはいい村だな」
俺の耳に届いたそれは、独り言だっただろうか。
午後六時になると、仕掛けが動き出した。
誰が作曲したのか知らない、これといって特徴のないメロディが流れ、時計台の本体からは子供の人形達が飛び出して、くるくる回り始める。淡いオレンジ色の光が子供達を包み、やがて六回の鐘が鳴り終えると共に、人形達は一斉に時計台の中へ戻っていくという、ただそれだけの仕掛けだ。子供達の表情が生き生きと変化することを除けば、古典的と言えるくらいに単純な構造で、とても古くからここにあるものらしい。
今では当たり前になって誰も立ち止まったりしないその時計台の前で、俺も最初の数日間は飽きもせずに立ち尽くしていた覚えがある。
だからなのか。俺はつい、口を開きかけた。
「お前……」
「おいディル！」
道の反対側から顔見知りの職人に声を掛けられなければ、俺は多分、そんなところに堂々と立っていたら危険だと、そんなことを言

おうとしたのだと思う。
泣き顔のような微笑みを浮かべたそいつが、ちらりと俺を見た。汚れきった軍服が不似合いで、夕陽を映した瞳がやけに穏やかで静かで、そして悲しかった。
そいつと俺との違いは、生まれた場所だけだったように思う。俺は軍人になることを拒否する自由があったが、きっとそいつにはなかったのだ。
真夜中近くになって、事件は起こった。
村中の住人が、その銃声で何が起こったのかを察しただろう。酒場で酔いつぶれた親方を迎えに行っていた俺は、偶然にも屋外にいた。そして、見てしまった。
静まり返った夜闇の中、仕掛け時計の前に誰かがいるのがわかった。
銃声が響いたのは、そのときだ。
人影の左ふくらはぎを、銃弾が貫通するのを見た。影が大きくよろめく。
「――っ！」
横道に突っ立ったままの俺を、酔っ払っていたはずの親方が引き倒した。親方の節くれだった手が、声をあげそうになった俺の口をふさぐ。意志とは無関係に全身が震える。
俺の右目は見た。立て続けに闇を貫く銃声に合わせて、人影の右肩、背中、首筋が次々と血を吹く様を。
大きく仰け反った体が石畳に倒れ、数秒の間、細かく痙攣して止まった。見開いた両目は、まるで俺の存在を知っていたかのようにこちらを向いて。けれど、浮かんだ表情は苦悶ではなく。
事切れる寸前にその瞳が流した涙まで――俺の右目は、見てしまった。
翌日、石畳の上には血痕だけが残っていた。誰が掃除したのか、すぐにそれも消えた。
見る者のいなくなった時計台からはいつもの明るい光景と音楽が

吐き出され、人形達がくるくる回り、滑稽なまでに日常を演出していた。まるで、夜の間に起こったことのほうが作り物めいて感じられるほどに。

噂では、脱走兵がいることを通報したのは、村長だという。村長には村を守る義務がある。俺にはその判断を責める権利はない。

「焦るこたぁないさ。なあ、ディル」

以来、思うように作品が作れなくなった俺を、親方は何度もそう言って慰めた。俺の義眼のことを知っている親方は、俺が異常に夜目が利くことも知っていた。

決して恨むわけじゃないが、親方はあのとき、俺の口ではなくて右目を塞いでくれるべきだった。なにもかもが、あの瞬間に壊れちまったんだと思った。

そして俺は――半年後。

内側の世界から逃げ出したように、村からも逃げ出した。俺を実の息子のように可愛がってくれた親方夫婦に、素っ気ない置手紙だけを残して。

そいつの代わりに俺が死ねばよかったなんて、そんな安っぽい正義感など持ち合わせちゃいない。

頭では十分わかっている。俺が何かをできたはずもないし、仮に俺があいつを匿ったとしても――せめて銃が発砲される前に危険を知らせてやることができたとしても、結果は同じだっただろう。そして、俺自身も殺されていたに違いない。

俺はただ、耐えられなくなったのだ。

罪の意識と呼べばいかにも陳腐な、けれど他にうまい言葉も見当たらない感情に、すっかり追い詰められてしまった。そして何より、絶望したのかもしれない。

俺が唯一憧れた仕掛け時計職人の道が、ただの平凡であじけない、どこにでも転がっている普通の職業に思えてしまった。誰かを幸福

な気分にするものだと思っていた仕掛け時計は、魔法でもなければ夢でもない。機械の寄せ集めにしか過ぎなかったのだ、と。
もし俺の右目が見えなければ、俺は今でも村に残っていただろう。そればかりか、村がとばっちりを受けるようなことにならなくてよかったと、喜んだかもしれない。
だが、俺には見えていた。明確な意識の中で見殺しにした。
俺は人影を発見すると同時に、銃の照準が既に狙っていることにも気づいていた。あの脱走兵が生存を諦めていることも、最初に目が合ったときに感じていた。そして誰よりも、俺は自分が少しも特別なんかじゃないということを知っていた。
俺はいつも、自分自身の弱さに怯えて生きている。そのくせ根拠もなく自信過剰で、いざというときには自分でも知らない力を出すのではないかという妄想を抱いてもいる。けれど何がどうなろうとも、俺はただ人より目がいいというだけの、紛れもない凡人でしかない。

――その目がディルのものになってよかったって、僕は思います。

確か、万引きが見つかってふて腐れていたときのことだった。
ルンは困ったように笑いながら、俺の顔を覗き込んだ。盗みは悪いことだけど、でもディルは、それを悪いことだとわかっていてやったんでしょう、と。
その言葉に揶揄する響きがあったのは、俺がわざと捕まったことに気づいていたからなのか。
自分の機械の目を呪い、大人達を非難し、拒絶し続けた俺の本音から、ルンだけが目を逸らさなかった。きっと、俺が臆病者だと知っていた。
昔から、俺は甘ったれている。今でもあいつがそう言ってくれるならと、ときどき思う。
俺はもう一度、昔に戻ることができるんだろうか。

「……クソったれ」
手を止めて、俺は舌打ちする。まだやり直したいと思っている、そんな自分に嫌気がさした。
床の上の吸殻からまだ吸えそうな煙草を拾い上げ、火をつけながら立ち上がる。壊れた窓のほうに歩きながら、俺は心底呆れ、それでも自覚するしかない。
俺は今でも、忘れられないでいる。捨てようとして捨てられない。それはまるで、俺が作ったガラクタ達のように。
生まれ育った街に、いつか誰もが息を飲むような仕掛け時計を建てることを。軍の技術で生まれた俺の右目で、嫌味なくらいに明るい光を作り出して見せつけてやると、そう誓った日を、俺は今でも、心の底から引き剥がすことができない。
薄暗い窓の外に広がる廃墟のようなこの一帯の向こうに、白い壁がある。その壁一枚隔てた場所に、俺が六年以上戻っていない世界が存在する。
今になって、ようやくわかったような気がした。
親方の元で生活するようになっても、数年に一度はこのあたりに足を向けていた理由が――そしてまた、ここに戻ってしまった理由も。
俺はきっと、自分が思っているよりもずっと往生際が悪い。
吸えないほど短くなった煙草を壊れた窓枠に押し付け、俺は少しずつ支配力を増していく夜の空を仰いだ。
酒を飲まずに夜を迎えるのは、ここを根城にしてから初めてのことだった。

4

翌日、俺は大袈裟な悲鳴で目を覚ました。窓からの陽の射し具合を見るに、朝っぱらと呼ばれる時間はとうに過ぎているようだ。

横になったまま視線だけを巡らせると、案の定、リゼットが来ていた。

「わたしの宝物がバラバラになってるわ！」

板を巡らせて風除けを施した、作業台代わりの箱――かつて工場が稼動していたときには機械の外面だったと思われる鉄製の筐体の前で、少女が目を丸くしている。そこに並んでいるのは多くのネジと歯車、小型回路、レンズ、薄っぺらな文字盤、装飾用の小さな人形、その他諸々の部品達だ。

「……分解したんだから当然だ」

寝起きで掠れる俺の声に振り返り、リゼットはその場に突っ立ったまま、いかにも不服そうな顔をする。

「これ、ちゃんと元の形に戻してくれるの？」

「お前が修理しろと言ったんだろうが。今でもそのつもりなら、絶対に触るなよ。順番に並べてるんだ。ひとつでも落っことしてみろ。二度と修復できなくなるからな」

この脅しは効果的だったらしい。

リゼットはスローモーションのような横歩きで作業台から離れ、三歩離れた場所から部品がひとつも落ちていないことを確認した後、かなり遠回りをして俺の側までやって来た。

「どこが悪いか、わかった？」

「多分、小さな歯車がずれたんだ。もともと、少し歪んでいたみたいだな」

「どうすれば直る？」

「部品を取り替えりゃ、どうにかなるだろう」

「その部品って、すぐに手に入る？」

「さあ……そいつはどうかな」
ここで言葉を濁し、俺はようやく身体を起こした。いつもの癖で煙草を探したが、すっかり切らしたままになっている。諦めて、俺はリゼットを見た。
「この近辺じゃあ、新しい部品を手に入れるのは難しい」
「立体映像だけでも、どうにかならない？」
大きな瞳に落胆と期待を半分ずつ浮かべながら、リゼットは俺の前に両膝をつく。
「……ママなの。本当のお母さんじゃないけど。マティアスにもらった、ママなの」
映し出される映像が、ということなのだろうと、俺は勝手に理解した。
昨日の話を信じるなら、リゼットは養成所送りを免れた子供で、助けてくれたのがマティアスとかいう人物ということだった。
「そいつは……じゃあ、お前の父親だったのか？　養父とか」
「ちょっと違う」
「兄貴か」
「そうじゃないの」
「まあいいさ」
追求する気になれず、俺はすぐに諦めた。詳しい話を聞いたところでリゼットの過去が変わるわけでもないし、ちょっとした興味以上に俺が満たされるわけでもない。
俺が気を悪くしたとでも思ったのか、リゼットは膝を抱えながら、俺を上目遣いに見る。
奇妙な沈黙が降りた。リゼットは俺から何か言い出すのを待っているようだったし、俺は俺で何を言えばいいのかわからない。
普段使ったこともない意識を働かせ、俺はようやく話題をひねり出した。
「……甘ったるくて、不味かったぞ」
リゼットは首を傾げて目を瞬かせる。

「昨日の飴玉」
「今度は、レモン味にする」
少し考えてから言い、リゼットは安心したように笑顔をみせた。こういう顔をすると、年相応に可愛げがある。それで俺は、自分に妹がいたことを思い出した。別れたときはちょうどリゼットと同じくらいだったが、今はもう男と同棲していたって驚かない歳になっているはずだ。慕ってくれていたとも思えないが、俺はあまり妹を可愛がってやった覚えがない。いい兄貴ではなかったと思う。
「ディルクには、戻る場所がある？」
この唐突な質問に、今度は俺が少し考えた。
「家って意味か？」
「家族とか友達とかお気に入りの場所とか嫌いな場所とか、思い出したいとか思い出したくないとか、そういうのを全部ひっくるめてやっぱり好きな場所」
「……めんどくせえ場所だな」
俺は溜め息と一緒に言いながら、ほんの少しばかり動揺してもいた。それは多分、俺が昨日の夜から考えているものと同じだろう。
マティアスは、とリゼットは続ける。
「爆風で飛ばされたときに怪我をして……いろんなものを失くしちゃった。あの時計だけは無事だったみたい。それを、わたしにくれたの」
「いい品だ。特権階級か金持ちの家の生まれだったんだろう」
「きっとね、マティアスは内側の人だったわ。頭もいいし言葉も丁寧だし優しいし、なんといっても、顔がきれい」
少なくとも顔は関係ないと思う。が、それを指摘すると話が脱線するだけでなく、ひがんでいるようにも聞こえそうなので、俺は別のことを言った。
「本人はどう言っているんだ？」
「どうも言わないわ。あまり話したくないのかもしれないし……覚えていないっていうのもあるのかもしれないけど。怪我とか病気で

昔のことを忘れちゃうことって、あるんでしょう？」
「あるんだろうな、本人がそう言うなら」
「でね、わたしはどこかの親切な里親に引き取られて、ちゃんとした手続きでＩＤを取得するのが一番幸せなんですって」
「そう言われたってか。その……」
「マティアスに」
「リゼットはよその家に行きたいと思うのか？」
「思わない、絶対に」
「じゃあ、思わないままでいたらいい。いずれ後悔しないって自信があるなら」
「うん」
まともな大人とは言い難い俺が、昨日出会ったばかりの少女の身の上話を聞いてやるなんて、まったく無責任以外のなにものでもない。
煙草がないので手持ち無沙汰のまま、俺は後ろ手に上半身を支え、だだっ広い工場内を見渡す。リゼットが続きを話そうが話すまいが、どちらでもよかった。興味本位で急かすだけの関心も、追求する権利も、俺にはない。
今度の沈黙は、少しばかり長かった。その間、窓辺に小鳥が飛んできて俺達を一瞥し、窓枠をちょいとつついてから飛び去っていった。
「マティアスには戻る場所はないの。そういうの、わかる？」
「なんとなく」
本当は、ちっとも、と答えたほうがよかったのかもしれない。俺が内側の世界に帰らない理由と、そいつが戻れない理由とは、きっと違って当然なのだろうから。
「わたしはうんと小さなころにマティアスに出会ったから、本当の家族のことは覚えていないの。でも、いろんなことを教わったわ。わたし、世の中のほとんどのことをマティアスと一緒にいて知ったんだから」

「……故郷も、か」
言ってしまった後で、俺は後悔した。
俺は聞き役だったはずだ。それに、俺の心の中に溜まっているものは、こんな少女に向けて吐き出すようなものでもない。
リゼットは俺を見つめたまま、言葉を選びとるようにして言った。
「そう。そこにいて許されると感じられる場所。離れていても繋がっていると思える場所」
「それは」
言いかけてうまい言葉がみつからず、俺は目を逸らして天井を仰いだ。
それはきっと、リゼットにとってマティアスという人物そのものじゃないのか。
「わたしが一番好きで、憧れている場所よ」
俺が口にしたなら軽薄な印象にしかならないだろう台詞を、まるで何かの決意さえにじませて声に出す少女の背景に、初めて影を見た気がした。そして同時に、丸みのある頬や大きな瞳が誇らしそうに輝いている姿に、俺は嫉妬さえ覚えてしまう。
その他に縋るものを持っていないからこそ願う場所。それは、俺にとっての夢と同じだろうか。
「お前……リゼット、本当は何歳なんだ？」
「十三歳と七ヶ月と六日よ。昨日よりは少しだけ大人になった」
大真面目に言われて、俺は笑うしかなかった。
たしかに人は、一日に一日ぶんしか変化できない。成長するか老化するかは別として。ただ、一日の変化の度合いには個性があって、リゼットはきっと、俺がガキだった頃よりもずっと早く大人になろうとしているのだ。
「これから、もっといろんな場所を見るようになる。好きな場所も増えるだろうし、もしかしたら嫌いな場所もな」
年上面して説教くさい台詞を垂れるつもりもなかったが、今の俺なら、そんなに早くガキを卒業することに意味があるとは思えない。

否応なしに一日ずつ時間が流れた後、ガキのまま夢見ているほうが楽だったと初めて気づくときの喪失感。あれは、誰もが経験することなのだろうか。
「今の気持ちはきっと間違っちゃいないだろうが、十年先でも正しいとは限らねえ」
「でもわたしは、マティアスが望まない限り、たとえＩＤを手に入れることができても、一生内側には行かないと思う」
俺は自分の中に、十三歳の自分を思い描いてみた。俺は生意気面して言うだろう。自分はクソみたいな大人にはならない、と。そして十三歳の俺がもし今の俺を見たら幻滅するだろうし、何もわかっちゃいないなりに抗議しただろう。今の俺は、昔の自分に嫉妬するだろうか。
――いや、今の俺は結局、昔の俺にそのままであって欲しいと願うことしかできないのかもしれない。
「……自分がそう決めてるなら、それでいいさ」
「わたしね、早くマティアスを安心させてあげたいの」
「ああ」
「わたしが彼の戻る場所になるのよ」
俺はどんな顔をしていいかわからないまま、早熟な台詞を吐く少女の顔をまじまじと見つめた。
意味をわかっていないなら軽々しすぎて滑稽だが、わかっているのなら微笑ましい恋心よりもずっと重みのある愛の告白だ。そして俺には、後者だろうと思えてしまったことを喜ぶべきか哀れむべきか、まるっきりわからなかった。
「ディルクったら、ヘンな顔」
「……うるせえな。生まれつきだ、ほっとけ」
「心配しなくてもディルクのことも好きよ、わたし。出会ったばかりだけど」
無邪気な顔をして、簡単に言ってくれやがる。嫌いじゃない、というだけの意味でその逆の言葉を使ってしまうのは、無神経でなけ

れば幼い証拠だ。この年頃の少女というのは皆、リゼットみたいに妙に扱いづらいものなんだろうか。
俺はそれ以上この話題に浸かっていることが耐えられそうもなくて、腰を上げた。
「出かけてくる」
「え？　どこ行くの？　修理は？」
「部品がねえって言ったろうが。あたってみるんだよ」
「部品が見つかったら、本当に前と同じにしてくれるの？　ううん、もし見つからなかったとしても、ちゃんと形は整えてくれるんでしょう？」
立体映像だけでもどうにかしろと言ったときは遠慮していたのか、今度は露骨に不安そうな顔をして、リゼットは俺の顔と部品達を見比べる。
「馬鹿にすんな。俺はこう見えて」
ちょっとした賞を取るくらいの腕はあるんだぜ。
するりと喉から先に出そうになった台詞を、俺は飲み込んだ。過去の栄光が今の生活にはまるで不釣合いで、そんなものにしがみついている自分が情けなかった。
俺のプライドなんて、所詮、その程度のものなんだろう。一度は自分が捨てたガラクタの中から少しでもまだ使えるものはないかと探し、ましな欠片を拾い上げて見せびらかそうとしているようなものだ。
「まあとにかく、俺を少しは信用しろ。そうでないなら、他をあたれよ」
「でも……だって、じゃあ、部品をあのままにして行っちゃうの？　誰かに盗られたら大変っ」
「どうせ誰もこんな場所に近寄りゃしねえよ。どうしても心配なら、お前が留守番してろ」
ふくれっ面のリゼットを置き去りにして、俺はのろのろと出口に向かった。

「待って、ディルク」
やっぱりついてくる気かと、半ばうんざりしつつもう半分で期待しながら振り向く。
「外を出歩くなら顔くらい洗ったほうがいいわ。もうお昼なんだし。子供じゃないんだから」
「……っせえな」
「なにか言った？」
「お嬢ちゃんはいい奥さんになれるだろうって言ったんだよ」
とても褒めたように聞こえたとは思えない。案の定、リゼットは拗ねた目つきで俺を睨む。
ガキだろうが熟していようが、女の扱いは面倒なものらしい。女が目つきでものを言うときは大抵、決定的にぶち切れる執行猶予期間だという脅しが含まれている。
「……二時間もすりゃ戻る。待ちきれなかったら帰っていいぞ」
つい取り繕うようなことを言ってしまう俺は、自分が小心者であることを、どうやら認めるしかなさそうだ。

部品がないと言ったのは、嘘ではない。あまってはいない、という意味で。
俺に唯一あてがあるとしたら、それはリゼットが多分まだいるだろう、工場の中だ。それでも俺が外に出たのは、リゼットにらしくない台詞を吐く自分が嫌になったからだけではない。
俺は迷っていた。俺が唯一所持している部品を、リゼットのために提供するかどうかを。俺にそこまでの勇気があるかどうかを、だ。昨日の夜からずっと、俺は自分の過去と未来とを秤にかけて、どちらも選べずにいた。
必要な部品は、少しばかり特殊な形状をしている。普通の時計を壊しても、あの形状と厚みの歯車は使用されていない。これは自慢のつもりでもなく、数年間はきっちり仕掛け時計職人の修行を積ん

だ俺だから言えることだ。
雑多な市場の端を歩きながら、俺は煙草を切らしていることを恨めしく思った。癖とか習慣とかいうのは侮れないものらしく、どうにも満たされない気分になってしまう。
それがないからといって死ぬわけでもないくせに、いざなくなってしまうと焦燥感にも似た感覚に襲われる。世の中のほとんどのものについて、同じように言えることなのかもしれない。
夢だの希望だの、そういう類のものもそうなのか。
この掃き溜めのような街で、何人がそんなものを腹の底に潜ませているだろう。ここではそんなものは、あんまりにも白々しくてまがい物めいている。けれどもしかしたら、ここの住人は知っているだけなのかもしれない。そんな透明で綺麗で形のないものをつかむには、おのれの手はあまりにも汚れている、と。
つい、俺は自分の手に目線を落とし、その後で苦笑した。
「……ガラでもねえ」
少し伸びた爪、皺が走るほど老けてはいないがガキの頃よりは艶を失った手の甲、昔より大きくなったけれどつかむものを失った手のひら。
両手をポケットに突っ込み、気分を変えようと大股で歩きだした、そのとき。
「あの、すみません」
俺の目の前に栗色の頭がひょいと現われ、行く手を遮られた。
「ええと……お腹、空いていませんか？」
「はあ？」
頭のおかしな奴だと思って露骨に眉根を寄せた俺は、次の瞬間には驚いてしまっていた。
昨日、俺がルンと間違えた男だった。昨日もそうだったが、長い外套で体のほとんどを覆ってしまっている。首から肩のほうに走る歪な傷跡を、今日の俺は見逃さなかった。
男は、なんのためらいもなく俺に笑いかける。

「リゼットがすっかりお世話になってしまっているようで」
「……あんた……もしかして、マティアス？」
「はい」
俺が想像していたより、ずっと――そう、優男だった。素直に言えば、貧弱そうで頼りがいがあるとも思えない。あのリゼットがどうしても離れたくないと思っている人物には、正直思えなかった。
「ディルク・アルトナーさん、ですよね」
「さん、は余計だ。ついでにフルネームで呼ぶな」
俺の不機嫌な声に、マティアスはわかりましたとあっさり頷き、それからのんびりとした調子で言った。
「実は僕、食事がまだなんです。寝坊していたらリゼットに置いてきぼりされてしまって。一緒にどうですか？　もちろん、ご馳走しますから」
「頼まれた時計の修理だって終わってねえのに、そんなことしてもらう義理はねえよ」
「案外、常識人なんですね」
どういう意味だ。
俺が文句を言うより先に微笑んで、マティアスは俺の少し先を歩きだす。それに従う義務などないはずなのに、数秒の間迷った末、俺は結局ついていくことにした。
実はほんの少し、興味があったのだ。マティアスとリゼットの関係や、その生きかたといったものに。
俺達が立ち寄ったのは、軒下にテントを張って屋台を出しているという、簡易な店だった。といっても、まがりなりにも飲食店で俺がまともにメシを食うのは久しぶりのことになる。女の家を追い出されて以来だから、優に十日ぶりといったところだ。
およそ衛生的でもなく、切り盛りする婆さんの愛想も悪い店先で、俺達は豆スープと、硬いパンに野菜と肉片を挟んだものを注文した。
「あんた、リゼットの父親でもなけりゃ兄貴でもないんだろう？」
幸いなことに味はまともなスープを喉に流し込み、俺は目の前の

優男に質問をぶつける。
「従兄でも叔父でもありませんね」
片手だけで器用にパンを口に運んでいたマティアスは、軽い口調で応じて笑った。
「僕達の関係を説明するのは、少し難しいかもしれません。僕がリゼットと出会ったのは、ここよりもずっと治安が悪くて国境にも近い町外れです。リゼットは銃殺された両親の側に呆然と立っている血まみれの四歳の子供で、僕はその頃、自分が何者であるかさえ見失っている有様でした。僕達が偶然出会って、目が合って、リゼットが泣き出して……あやしている僕がいて、僕は目の前の子供を助けようと決めると同時に、生きる気力を取り戻したわけです。お互いが命の恩人で、ある意味似たもの同士でもあるのでしょうか」
それはまるで、物語を話すような語り口だ。
リゼットはたしか、マティアスは爆風で全てを失ったと言っていた。首筋の怪我の跡から察するに、命拾いした場所は軍の最先端の医療施設ではなく、民間の――もしかしたら辺境の病院なのかもしれない。
「あんた、もとは軍人だったんだろう？　戦地から脱走したのか？　それとも工作機関から？」
「さあ……どうでしょう。自分でもよく覚えていないのです」
やんわりと首をひねる仕草に明確な拒絶は感じられなかったが、俺には、言いたくないという意味に聞こえた。それ以上詮索しようという気は、俺にもない。この世界には何も傷を持たずに生きている人間のほうが少ないのだ。自分の傷がいかに深いか見せびらかしたり、比較したりするものでもない。
マティアスは俺がそれ以上何も言わないことに薄く笑って、別の話題を持ち出した。
「時計は直るでしょうか？」
「修理は可能だ。ただし、部品さえあれば、だが」
事実を答えておいてから、俺はちらりと目線を上げる。

「あの時計、もともとあんたのなんだってな。リゼットが立体映像だけでもなんとかしろと言ってきた。ママだから、てさ」
答える気がなさそうなら、俺はあっさり引き下がるつもりだった。だが、マティアスは静かに微笑む。少しだけ、哀しみの灯った瞳で。
「妖精です」
「なに？」
「映し出される映像の中に、大人の女性のような妖精が登場するのです。リゼットは自分の両親のことを覚えていません。小さなあの子に母親をねだられたとき……僕には他に慰める方法がわからなくて」
俺は、小生意気なリゼットの顔を思い浮かべた。
マティアスの戻る場所になると、早く大人になりたいと言うリゼットは、その一方でグラフィックの――偽物の映像に得られないぬくもりを求めている。その危うさが、俺には世界中で一番繊細でかけがえのないものに思えた。どこまでも脆くて、そのぶん美しい何かだ。
こんなことを感じたのは、いつぶりのことだろう。
「リゼットは、よほどあんたが大切なんだろうな。きっとあんたが思ってる以上にさ」
「そうかもしれません。この間、言われてしまいましたから。僕がおじいちゃんになっても、面倒をみるのだそうです。僕がリゼットを幼児ポルノにも軍にも売らなかったから、僕を老人収容施設には入れないのだとか」
声は優しいが、笑ってはいない。その理由に、俺は思い当たった。
「あんた……マティアス、気づいてるのか。リゼットがあんたのことをどう思っているか」
「僕だって人間だし、男です。恋の経験くらいありますよ」
ずっと以前のことですが、と。マティアスはわずかに目を細める。
リゼットが抱いている感情は、あれは恋心というやつだ。もしかしたらそれは、純粋な初恋だとか淡い想いだとか、そういうものよ

りもずっと重みがある。
「僕はリゼットの倍も歳上なんです。僕が先に老いるのは当然でしょう。きっと死ぬのも」
決して揺るがない事実を口にするように、ことさらゆっくりとマティアスは言う。昨日今日二人に出会ったばかりの俺は、黙るしかない。
見るからに温和な優男と、小汚くて人相もいいとは言えない俺が、向かい合って黙々と食事を摂るという、なんとも奇妙な構図がしばらく続いた。
「ディルクはもともとそういう職業の人ですか？　ええと……時計を修理するような」
自分のせいで話が途切れたことに気を遣ったのか、マティアスが再び口を開いた。
「ああ……仕掛け時計を作ってた」
「仕掛け時計。あれはいいです、夢があって。僕もリゼットも好きですよ。街角に時計台があるような場所では、必ず立ち止まって見上げます。あそこには、僕達が憧れる世界がある」
「――よせよ。やめてくれ」
恥ずかしいというより、俺の心を占めた大部分は苛立ちだ。
「どれだけ綺麗なものを作ったって、夢みたいなことを言ったって、現実とは違う」
「でも、だからこそ焦がれるものですよね。だから惹きつけられてしまう……。夢みたいな作り物が現実に存在しないことに憤るなんて、それは夢をみたい証拠です。夢を切望することは……そうだ、仕掛け時計の存在そのものにも似ていますね」
芝居がかっているほど気障なくせに、極自然な台詞だ。俺は絶句したまま、マティアスの顔を見た。
まるで見透かすように俺の顔を見返す、どちらかというと中性的な顔立ちや眼差しに、俺はたまらなくなって顔を背けた。
「あんた……なんとなく似てるんだ。ガキの頃の親友に。そいつだ

けが、俺の無鉄砲な夢を笑わなかった」
「それが、探している人なんですね」
俺は、硬くてぱさついたパンを飲み込みながら、曖昧に首を振る。
「死んだらしい。人伝に最近知った。探してもみつかるはずがない」
そうですか、と哀れむでもなく簡単に頷いたマティアスは、その後で驚くほど優しく微笑んだ。
「この世界には、大切な人やものをなくした人が、多すぎます。でも僕は、その人が死んでしまったことを認めないままでいることが、現実逃避だとも思えません」
「なんの話だ？」
「真実は、ここにしかないということです」
マティアスは右手のスプーンを置き、その手で胸を指差した。
「僕は色々な場所を旅してきて、夫や恋人や兄弟や友人を失った人を大勢見てきました。そういう人達の多くは、死んでしまった人からの言葉を待っている。こんなとき、あの人だったらなんて言ってくれるだろうか、と。でも、自分の求める言葉は自分の中にしかない。その人の存在を心の中からまで消してしまうか、それを決めるのも自分です」
まんまと図星のど真ん中を射抜かれた間抜けな俺は、少しだけ楽しそうな表情を浮かべた目の前の男を、恨めしい気分で睨んだ。
「それに、僕もリゼットも死んだことになっている人間です。死んだと思われている人が実はどこかで生きているという幻想を抱くことは、必ずしも馬鹿げたお話ではありませんよ」
「……あんた、一体……」
どんな商売をしてりゃ、そんなに口がまわるんだ。そう思ったままに言うと、マティアスは初めて声を出して笑った。
「リゼットの言葉を借りると、憂いの伝道師だそうですよ、僕は」
「なんだそりゃ」
「語り部のようなものです。国中を旅して、各地で起こっていることや誰かの想いを話して回るというね。人々の記憶を少しずつ蓄え

て、別の場所で誰かに分け与えるというか。僕はそうやって、この世界の痛みを少しでも和らげることができればいいと、そんなふうに思うのです。場所によっては重宝がられるようで、食べるには困りません」

「……わからねえよ、なんだってそんなことをするのか。この世界は、そんなことくらいじゃ変わりゃしねえ。あんたやリゼットが世界中を旅したとしても――」

俺が、どんなに立派な仕掛け時計を作ったとしても、だ。きっと変わらない。だから俺は、絶望して投げ出して、背を向けた。

「きっと、未練なんでしょう。平和への希望であって、幸福への未練なのかもしれませんね。僕が両手でつかみ損ねた未来へ、少しでも近づきたくて」

未練という言葉をこんなに素直に口にできる存在に、俺は羨望と嫉妬を同時に抱かずにはいられない。――なぜなら。

マティアスの左手は、手首から先がなかった。それでも、辿り着くための未来はあるという。

「なあ、俺の仕掛け時計……見てってくれないか。俺が唯一側に置いている完成品なんだ。リゼットも見たいと言ってたし」

目を細めるマティアスに、本当は似てはいないはずの親友の笑顔が重なった。

俺には、望んだ道を選べる幸運がある。

やはり奢ってもらう理由がないと、なけなしの小銭をテーブルに置いた俺は、世界の痛みを和らげるという馬鹿みたいに壮大な計画の意味を、ほんの少しだけ理解した。

それは多分、俺が故郷に仕掛け時計の塔を建てたいという気持ちに似ている。

きっと、この腐った世界に向けたささやかな祈りなのだ。

5

時計の長針が文字盤の頂点と重なった。
その瞬間、かすかな歯車の音と共に仕掛けが動き始める。周囲に映し出されたのは、淡い黄色と薄緑色のグラデーションだ。時計の文字盤を中心に据えた金色の塔が、光の渦の中を歩く人形を見下ろしている。
人形が、入り口のない塔に辿り着いた。無機質な塔を呆然と見上げながら、人形はその周囲をぐるりと歩く。やがてその場に座り込んだ人形は、頭上から舞い降りる羽に手を伸ばした。
鳥の姿はない。どこからともなく聞こえる音楽は、どこか懐かしいオルゴールの音色。
塔の上がぼんやりとした光を放ち始める。それは次第に虹色に変化し、人形の上に降り注いだ。
立ち上がった人形が、肩に掛けていた自動小銃を取り落とす。
光に導かれるように、人形――彼は、歩き出した。光の塔へと。
彼が金色の塔に触れた途端、塔は彼を招き入れるためにその形を変化させて道を開く。そこに広がるのは、無限の光景。
彼の生まれ育った町であり、彼の愛した場所であり、彼がずっと取り戻したかった温もりだった。
――帰還のとき。
今見れば、人形の顔がいまいち間抜けだとかオルゴールのタイミングが遅いとか、欠点はある。それでも今だからこそ、この作品が認められた理由もわかる気がした。
俺はこの作品を生み出すために、ありったけの情熱と想いを込めた。自分のできる精一杯をぶつけた、そういう一途さがこの作品にはある。
「……いつか、みんながこうなるといいのにね。ねえ、マティアス？」

「そうだね」
囁くような二人の声に、髪の毛一本分ばかり残っていた俺のためらいは完全に姿を消した。
「明日の昼までに、お前の時計の修理は終わらせておいてやる」
「本当？　部品は見つかったの？」
「ああ、どうにかなりそうだ。楽しみに待ってな」
マティアスが何か言いたそうに口を開きかけたが、俺は唐突に煙草の銘柄を挙げることで遮った。もしも報酬を気にしているのなら煙草をひと箱くれないか、と。
二人が帰った後、俺はもう一度だけ自分の過去の作品世界に浸ってみた。
確かに悪くない。
悪くはないが、俺はきっとこれを超えるものを生み出してみせる。そうでなければ、こんなに長い間腐っていた意味がない。
「……だよな」
自分自身に頷き、工具を手に取る。
時計を止めると、俺はかつての自分の傑作を解体し始めた。

俺が仕掛け時計の職人になりたいと言ったとき、母親は最初、本気にはしなかった。問題ばかり起こしているとはいえ、自分の息子がそこまで無鉄砲で馬鹿なことを言い出すとは思わなかったらしい。そして俺が本気だと知ると、あらゆる手を使ってその考えを改めさせようとした。
時には諭すように、時にはヒステリックなまでに、いかに俺の考えが間違っているかを説こうとした。地下室に閉じ込められたこともある。食事をもらえなかったこともあるし、そうかと思えば好物ばかりを並べられ、何でも欲しいものを買ってやると機嫌を取られたこともある。
俺は心の底からうんざりしていた。内側の世界では、与えられた

仕事や役目を果たすことが最も重要なことであり、俺のようにそのレールから外れてしまった者への風当たりは極端に冷たい。俺の母親はこうした軍の徹底したコントロールの中で純粋培養され、遺伝子的に相性がよいとされた俺の父親と結婚し、二人の息子と一人の娘を産んだ――そういう人だった。

「どうしてお前はわからないの？　どうして兄さんのようにいい子でいられないの？　ああ、どうしてお前は……。お前みたいな子を持った母さんが外でなんて言われるか……ディルク、お前は母さんをかわいそうだとは思わないの？」

俺には耐えられなかった。与えられる愛情ですら、それが役目であるからに過ぎない。すべてはまやかしだ。俺をなにがなんでも更生させようとする母親の行動も、国立学校の教師としての立場やプライドを守るためのものだとしか、俺には思えなかった。

今なら少しだけ――ほんの少しだけなら、わかる気がする。

おふくろも必死だった。俺がそうだったように。

本当に俺を持て余し、憎み、軽蔑するのなら、軍事施設へ強制的に送ることもできただろう。国民としての義務を何よりも重んじる立場を優先するなら、軍を嫌って父親や兄の葬儀にすら出席しなかった俺を、身内の反乱分子として突き出すこともできたかもしれない。

そうしなかったのが、唯一の愛情だったのではないかと、今ならそう思える。外の世界で出会った親方のげんこつやおかみさんの抱擁ほどわかりやすくはなかったが、俺が内側の世界から零れ落ちてしまうことを、嘆き悲しんだのだ。それは母親自身のためであったかもしれないが、俺のためでもあったと思う。内側の常識では、外側の世界は内側よりずっと劣る場所なのだから。

俺の悪友達も、結局のところは内側の常識から逃れることはできなかった。奴らにとって俺と一緒に悪さをしていた日々は火傷みたいなもので、笑い話で、そしてもしかしたら、今は後悔なのかもしれない。

「俺がいつか、お前らの度肝を抜くような時計台を建ててやるよ」
俺が仕掛け時計の職人になるためにいつか外の世界へ行くと話したとき、ほとんどの仲間が呆れるか冗談だと笑い飛ばした。奴らにとっては、いずれ従わなくてはならない世の中の流れにほんの少し逆らってみることが楽しいのであって、最後まで流れに乗らないという選択肢はありえないものだったらしい。
「本気で言ってんのか？」
「やめておけよ、ディル。ただでさえ俺達、軍にも目をつけられてるんだぜ」
「ここいらで限界さ。外の世界に追放されるのも、まっぴらだからよ」
俺が傷ついたのは、仕掛け時計の魅力をわかってもらえなかったからじゃない。趣味趣向は別にしても、こいつらだけは俺と同じ気持ちだと信じていたからだ。
「お前らがそんな軟弱者だとは思わなかった。俺は本気だからな。絶対、この世界を見返してやる。絶対だ！」
ほとんど意地になって叫んだ俺の周りには気まずい空気が流れ、仲間達は曖昧な言葉を残して去っていった。いつも溜まり場にしていた広場の片隅にすっかり取り残されて、俺はほんの少し赤味の差した空を見上げるしかなかった。俺の言っていることはそんなに無茶なことだろうか、と自問しながら。
離れた場所にいたルンだけが、そっと俺のほうへ寄ってきた。
「その目がディルのものになってよかったって、僕は思います」
「……なんで？」
「だってディルの夢は、きっとみんなを幸せにする。僕達が本当に憧れる世界を、人形や映像で実現させることができる。支配力を広げるために近隣諸国の人達を殺し続けることに、この国の未来はありません。僕達はもっと夢を抱くべきで、もっと夢の実現のために努力すべきなんだ」
ルンの言うことは、ときどき教師みたいに堅苦しい。俺の頭では、

軍の最高幹部達が何を目指そうとしているのか理解できないし、誰のせいで俺達がこんなにも階層化された社会で生きなくちゃならないのかもわからなかった。
「僕らは本来あるべき姿に戻るべきなんです。この国がたった百五十年前までは、平和な国だったように。僕らはそこへ帰るべきなんだ。……僕やディルみたいに、今の体制に疑問を抱く人が大勢集まれば、きっと何かが変わる。僕は、そう信じたいんです」
「お前の言うことは俺には難しくてよくわからねえけど……でも、俺もこのままじゃ嫌だとは思うさ。俺みたいな馬鹿でも、何かやれるならやってみてえと思うし」
「ディルは馬鹿じゃありませんよ」
にっこり笑って、ルンは俺を見上げる。
ルンは痩せていて色白で、決して喧嘩も強くない。力比べなら俺のほうが絶対勝つ。それなのに俺は、ルンだけには勝てないんじゃないかと思う。
「なあルン、なんでお前は医者になりたいんだ？」
足元の小石を蹴飛ばしながら、俺は前々から思っていたことを口にした。
「お前は頭もいいし、医者じゃなくなってなれる職業はある。科学者とか、教師とかさ。もちろん、お前が特権階級を蹴ってまで医者を目指すってのはすげえことだと思うけど……医者でなくちゃならない理由があるのか？」
「僕にそんなことを訊いてくれるの、ディルだけだな」
さも特別なことのようにルンは言ったが、実際、そうなのだろう。俺もそうだった。誰も理由など訊ねてはくれないし、話しても理解しようとしない。多くの大人にとって、俺の夢は現実から逃れるための方便で、ルンの目指すものは理解の範疇外だった。俺達に唯一共通しているのは大人が手を焼く存在であるということで、それだけが俺達を結び付けている絆だと言ってもよかった。
「僕は学校に上がるまで身体が弱くて、病気を治してくれる医師っ

ていうのが魔法使いみたいにすごいものだと思っていたんです。だけど、そうじゃなかった。先生は僕の風邪や腹痛は治せても母さんの病気は治せませんでした」
　ルンの母親は、俺達が出会うより前に死んでいた。家族に死人がいることは、そう驚くことじゃない。
「そればかりか、母さんが死んだときにこう言ったんです。最先端の医療措置を受けられただけ、幸せな女だと。確かに……外の世界の人達に比べたら幸せかもしれない。でも、死んでしまったとき、母さんは人の形なんてしていなかった。体中の悪い所は全部機械になって、まるで……まるで、機械の塊で」
「もういい……言うな」
「きっと母さんに意識があったら、人間として死にたいと願ったと思います」
「――ルン」
　俺は後悔した。興味心くらいで、医者になりたい理由なんて訊くんじゃなかった。
「僕は、人間らしい医者になりたい。そういう医者がいないなら、僕がなるしかないって思ったんです」
　ルンはそう言って笑った。俺には笑えなかった。
　俺はさっきよりも大きな石ころを思いきり遠くへ蹴飛ばし、ルンから離れた。
「俺がもしここに時計台を建てたら、見に来いよな」
「もちろん。ディルならきっと実現してくれるって、僕、楽しみにしてます」
「その頃にはお前、医者になってるだろ？」
「きっと」
　このときの約束を思い出しながら最初に完成させたのが、『帰還のとき』だ。
　俺達は当時、何の力も持たないガキだった。ただ、自分達には特別な力があるのかもしれないと信じることしかできない、ガキだっ

た。
俺が決心を実行に移したのは、それから数ヶ月後の朝のことだ。
「じゃあな、ルン。俺……多分、お前にはしばらく連絡しないと思う」
「わかってる」
「いつかどこかで」
「外の世界のどこかで会えるといいですね」
俺の言葉を引き継いで、ルンは手を振った。俺を見送ったのはルンだけだった。
それ以来、ルンには会っていない。
――そのルンが。
一年半も前に死んだという。
俺は遺体を見たわけじゃない。だから、マティアスの言うように万が一でもルンが命拾いしている可能性を否定はしない。完全否定はしないが、そんな可能性にすっかりすがってしまえるほど、俺はおめでたい思考回路の持ち主でもない。
だけど、そんなことは関係ないのだ。
「……見てろ、ルン。お前がどこで見ていたって、俺は約束を守るから」
たとえそれが地上のどこかでも、地上よりもずっと高い場所からであったとしても。
俺はきっと、お前との約束だけは果たしてみせるから。
お前のことを忘れようとしていた薄情な俺を、どうか許してほしい。

「大事にしろ。今度は落とすなよ」
翌日の午後、時計を受け取りに来たリゼットは、完全に修理を終えた時計に大喜びした。
「すごいわ、ディルク。本当に直しちゃった！　見て、マティアス。

ちゃんと直ってる」
「よかったね」
マティアスはリゼットには微笑み、俺には申し訳なさそうな顔をした。きっと、俺がどこから部品を手に入れたか気づいているのだろう。どうやらリゼットには話していないことが、俺の気持ちを尊重してくれているようでありがたかった。
リゼットはさっそく時計を動かす。最初は規則正しく秒針が動くことを確認し、それから時間を正午に合わせた。
子守唄が流れ始め、半透明の羽を持つ小さな妖精達が時計の周囲を旋回する。中心に現われたのは、花冠をかぶった長い髪の女性――見たところ、妖精の女王様とでもいう感じの人物だ。子守唄の歌声は、どうやら彼女のものらしい。
「あれは、僕が子供の頃に親から与えられたものなんです」
妖精達との再会に夢中になっているリゼットから離れ、マティアスが小声で俺に打ち明けた。
「だろうな。あんた、特権階級の人間だったんだろう」
「……昔は、それが誇りでした。外の世界を知るまでは、外界の人間は僕と血の色すら違うのではないかと思っていたくらいです。外の人間を殺したって罪にはならないとね」
「典型的な支配者意識ってやつだな。反吐が出る」
マティアスは苦笑して、真正面から俺を見た。声を落としたまま、話し始める。
「僕は国境部隊の駐屯地に、期限つきで派遣された身でした。ゆくゆくは軍の最高指令本部の将校として、実際の戦地に出ることもなく生涯を保障されて生きることのできる立場です。でも、僕が派遣された町が敵襲に遭い、僕は重症を負って、気がついたときには野戦病院に収容されていました。僕が意識を取り戻した頃には部隊は完全に姿を消していて……僕は信じていた軍に捨てられて、軽蔑していた民間人に助けられたのです。――リゼットに出会ったのは、そういう自分の運命を呪うことも諦めることもできない、そんな時

期でした」
「……なんで俺なんかに話す？」
「あなたには嘘をついてはいけない気がして」
「そいつはどうも。だからって、俺は神様ってやつじゃねえしよ」
あっさり言ってやると、マティアスはどこかうれしそうに微笑んだ。
「そうですね。僕はただ、ひとりくらいには打ち明けてみたかっただけなのかもしれません」
「忘れたふりで追求を逃れるのも、楽じゃないってか？」
冗談めかして笑った俺は、リゼットが恨みがましい目つきでこっちを見ていることに気づいた。どうやら、男同士の会話から仲間はずれにされたことを抗議しているらしい。
「頼みがあるんだ。あんたと、それからリゼットに」
自分の名前が呼ばれた途端、リゼットの目が好奇心に変わる。俺が指でこっちに来るよう合図すると、しつけられた小型犬みたいに駆け寄ってきた。長く伸ばした金髪が背中で跳ねるのが、まるで尻尾みたいだ。
「ルンに……いや、エミールだ。エミール・ベステル。いつかもし、こいつやこいつの知り合いに会ったら、言ってくれ。そのちっこい時計は俺が修理したんだってな」
「ルンって、確か」
死んだんじゃなかったの、とリゼットは言わなかった。代わりに、さっきまでガキのものでしかなかった顔つきが、事情通の大人のような表情に変化する。
「ディルクの一番大事な友達のことね」
「ああ」
俺は素直に頷いた。リゼットが俺を頼ってくれてよかったと、このとき初めて心から思った。
ほんの数日間だけ、たまたま出会った俺達だ。だが俺はきっと、リゼットやマティアスのことをこれから先、何度も思い出すことに

なるだろう。
これは、その場限りの感傷なんかじゃない。腐りきっていた日々に終止符を打つことになったきっかけは、俺にとってルンとの思い出の次に大事なことに違いないからだ。
二人はこれから、隣町に向かって出発するのだという。
「行くよ、リゼット」
マティアスが呼んだ。その声は優しい。
「さよなら、ディルク。本当にありがとう」
「元気でな」
廃工場の出口まで見送った俺は、何度も振り返るリゼットと会釈するマティアスに向かって、片手を挙げて応じた。
リゼットが何か言いながらマティアスを見上げ、マティアスはその頭をそっと撫でる。
たとえば十年後、二人は今のように無邪気なだけの関係ではないかもしれない。それでも、今とは少し違う関係で寄り添っている二人の姿が、俺には見える気がした。
俺の手元には、律儀にマティアスが買ってきた煙草が一箱と、リゼットがくれたレモン味の飴玉が残った。

夕方になって酒場で電話を借り、俺は六年ぶりに実家に連絡をした。こちらの機種と通信状態が悪すぎて映像は入らなかったが、電話に出たのは間違いなく母親だとわかった。
おふくろの声は確実に老けていたし、俺の声だって十六の頃とは違ってるはずだ。それでも一瞬で、お互いが誰であるかわかってしまった。もしかしたら親子の絆なんてものは実在するのかもしれないと、妙に感心してしまった自分が可笑しい。かといって、俺が冷静だったかというとそうとも言い切れず、俺は端的に、あまりにも手短に、とりあえず元気でいるということしか言えなかった。
「いつか……帰るから。必ず。でかい土産を持って、帰るから。そ

れまで、ＩＤ登録は抹消しないでおいてくれ」
おふくろは泣いていた。ほとんど会話にはならなかった。
「体に気をつけろよ。……今更だと思うけどさ」
じゃあ、と電話を切ろうとしたとき、おふくろが何か言った。
あなたも、と。そう聞こえた気がした。俺は、また電話すると早口に言って、回線を切った。そうでなければ、俺のほうがどうにかなりそうだったからだ。
酒も飲まずに、俺は外へ出た。ちょうど陽が暮れかけて、道路の両脇にはぽつりぽつりと明かりが灯り始める。その灯りがほんの少しだけ滲んで揺れているのは、きっと、この街が俺に送ってくれた餞別だろう。救いようのないほど汚れきったこの街を、初めてきれいだと思えたのだから。
翌朝、俺はこの街を出るつもりだった。
親方は、勝手をした俺に腹を立てているだろう。殴っても、許してくれないかもしれない。それでも俺は、回り道をして戻った覚悟をわかってもらうまで、食らいつくつもりだ。下っ端修行からのやり直しでも、今度こそ逃げたりしない。
――ディルならきっと実現してくれるって、僕、楽しみにしてます。
俺も自分のことを信じたい。もう一度。
世界中に、俺達の願う世界を。
あの無機質な広場に、時計台を。
今度は、夢にはしない。必ず実現させる目標として。
「とりあえず……髪、切らねえとな」
伸びすぎた髪は、くだらないプライドと一緒に置いていこう。
そして。
俺は帰る。いつか、あの場所へ。
かけがえのない約束と、懐かしい記憶の眠る――あの街へ。

5（後書き）

最後までお付き合いくださって、ありがとうございました。
諦めきれない夢を持つ人（自分かな？）に向けて書いた物語でもあります。
もしよろしければ、感想などいただけると嬉しいです。

叶　響希
「Ｃｈａｒｔｒｅｕｓｅ　ｇｒｅｅｎ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9879i/

記憶の眠る街

2010年10月8日15時25分発行